

ハドリアヌスの円形浮彫り群の図像解釈について

—— 犠牲式図像を手がかりに

坂田 道生 (筑波大学)

マクセンティウス帝への勝利を記念して紀元後 312 年から 315 年の間に建造されたコンスタンティヌスの凱旋門を飾る浮彫り群は、元来、別の時代の複数の建築から取り外され、再利用されたと考えられている。中でも紀元後 2 世紀に制作されたと思われる質の高い 8 つの円形浮彫り群は、ハドリアヌス帝と関わりがある建築に由来するとされてきた。8 つの円形浮彫りは、全て狩猟を主題とし、ハドリアヌスと家臣たちの狩猟への出発、猪、熊、獅子の狩猟場面、ディアナ、シルヴァヌス、ヘラクレス、アポロへの狩猟後の犠牲式が表現されている。

これら円形浮彫り群の図像解釈に関しては、ハドリアヌスの愛人アンティノオスの吊いと関連づける説やハドリアヌスの事跡を記録しているとする説などが提起されてきたが、現在、最も受け入れられているのは、ポートライトが提唱した寓意説である。この説に従えば、3 つの狩猟場面には皇帝の *virtus* (勇敢) が、4 つの犠牲式場面には *pietas* (敬虔) が表されていると解釈される。

これら従来の説では、4 つの犠牲式場面において、神像に対して犠牲が捧げられていることについては注目されてこなかったが、発表者はその表現が図像解釈にとって非常に重要であると考えた。古代ローマの犠牲式は、儀式の目的、執行者、場所によって、公的と私的の 2 種類に大別される。公的な犠牲式では、神像は必要とされず、儀式は通常、本尊のある神殿内ではなく、神殿の外の祭壇で行われた。そのため現存している犠牲式場面は、神像を伴わず祭壇と共に表されるのが一般的であり、これらのほとんどは公的な犠牲式を表現していると思われる。ハドリアヌスの円形浮彫り群のように、祭壇に加え神像も表されている作例は非常に数が少ない。

古代ローマの美術作品において神像に対する犠牲式が表されている場合は、私的領域における犠牲式が表されていると思われる。文献においても、スエトニウス等の記述にそのような例を見出すことができる。さらに、円形浮彫り群と類似する犠牲式場面を描いた 3 つのモザイク作例が存在し、娯楽としての狩猟に際して行われた、神像に対する犠牲式が表されている。このうち 2 作例は、別荘の *triclinium* (食堂) に敷かれた舗床モザイクであったとされ、来客との *symposium* (饗宴) の為の部屋の床面を飾っていた。

以上から、円形浮彫り群の図像では、ハドリアヌス帝とその家臣たちを狩猟という娯楽の場に表すことで、皇帝とその家臣たちの健康と繁栄が祈願されているのではないかと考える。また、この結論は、円形浮彫り群の元来の設置場所の推定にも援用されうるとと思われる。